

第 35 号

2003年9月

岡山県古代吉備文化財センター

▲ 西江遺跡（哲西町）出土特殊器台文様



津島遺跡 北池・南池の確認調査（南上空から）

よみがえる津島遺跡 ～7年間の調査をふりかえって～

津島遺跡は、岡山市いずみ町の県総合グラウンド内に所在し、岡山県を代表する著名な弥生時代の集落遺跡です。昭和43（1968）年、武道館建設工事により遺跡の一部が破壊されましたが、保存運動及び発掘調査の結果、公園の中心部が国の史跡に指定され現在に至っています。

この遺跡が再び注目を集めたのは、園内の陸上競技場が平成17（2005）年開催の岡山国体の

主会場候補地に挙げられた平成9（1997）年度のことでした。これを契機として、国史跡でありながら遺跡の実態に未解明の部分が多いため、史跡整備を視野に全域を対象とした確認調査の必要性が浮上してきました。以来、陸上競技場改修、史跡整備、新県立体育館建設に伴う発掘・確認調査が実施され、多くの成果をこれまでに所報や報告書で紹介しています。一方、過

去の調査成果の整理も進め、長年懸案となっていた昭和30～40（1955～65）年代の調査報告書の刊行も行いました。

その一連の調査事業は、平成15（2003）年度の新県立体育館建設に伴う調査をもってひとまず終了します。足掛け7年に及んだ調査成果をもとに、津島遺跡の2千数百年にわたる歴史を概観してみたいと思います。

現在の総合グラウンドは、珪藻分析などの結果によると縄文時代後期～晩期頃までは浅海または河口だったようで、人の居住できる場所ではありませんでした。その後、河川の運ぶ土砂が徐々に堆積して安定した陸地が形成され、晩期終わり頃には人の活動が始まったことが少数の遺物から知られます。しかし、まだ定住と呼べるほどの生活だったかどうかは不明です。以後の津島遺跡の歴史は、堆積作用による微高地の拡大と、そこに展開する集落や耕地の変遷として理解することができます。

弥生時代前期には、園内のほぼ全域に水田が広がり、周辺地区にも及びます。武道館当初予定地や南池などでは、微高地部分に集落も存在したようです。水田は畦畔や水路を伴っており、整然とした区画は規模こそ違え現代の田園風景を彷彿とさせます。集落域では土壘などから前期前半の土器が多数出土し、武道館当初予定地では朝鮮半島の影響を受けた「松菊里型土器」と呼ばれる特異な土器も出土しました。なお、現在の視点からすると集落に比べ水田域の面積が非常に広い印象を受けます。この理由はまだ



弥生時代前期の水田（陸上競技場調査区）



弥生時代前期の土器溜まり（南池調査区）

よく分かりませんが、当時の稲作技術に起因すると考えられます。土壌中のプラントオパール（植物珪酸体）分析では、イネの検出数は意外に少なく、耕作域を移動しながら作付・休耕を繰り返す農業の在り方が示唆されています。したがって、広大な水田域も一時期に使用されたのはごく一部ということになります。

弥生時代中期には、堆積作用により地面が嵩上げされ地形はより安定しますが、集落域はさほど広くなく、旧補助陸上競技場や新体育館など数か所に分散して見つかっています。新体育館調査区では集落と墓域が隣接して検出されました。また、陸上競技場調査区では用水路と思われる巨大な溝が開削されています。この時期には、南方遺跡など津島遺跡よりもやや南側の地域に大規模な集落が形成されていたようです。



弥生時代中期の竪穴住居（新体育館調査区）

弥生時代後期から古墳時代にかけては、津島遺跡の最盛期といえる時期で、多数の竪穴住居を伴う集落が陸上競技場や野球場などの周辺で広範囲にわたって検出されています。特に全面

調査を行った陸上競技場調査区では、大規模な河川とその両側に展開する集落が明確に捉えられ、当時の景観が思い浮かぶようです。また、河川跡から弥生時代後期の建築部材や各種木製品が大量に出土したことも特筆される成果です（本誌第30号参照）。



弥生時代後期の建築部材（陸上競技場調査区）

続く古墳時代にも、ほぼ同じ範囲で引き続き集落が営まれました。この時期の竪穴住居は、それまでの円形と異なって方形が中心で、中期以降は壁際にカマドを付設するものが出現するなど、生活様式の変化が読み取れます。



古墳時代の集落（陸上競技場調査区）

古代以降になると、津島遺跡の景観は一変します。集落はなくなり、大規模な造成によって再び広大な水田が姿を現しました。以来、津島一帯は明治時代に至るまで岡山平野の穀倉地帯としての役割を担うこととなりました。この時期の遺構では、古代の土地区画である条里制に則した東西・南北溝が注目されます。

明治40（1907）年、岡山に旧日本陸軍第17師団



古代の条里溝（陸上競技場調査区）

が設置され、津島遺跡一帯は大幅な造成工事により軍用地へと変貌します。軍関係と特定できる遺構は少ないのですが、新体育館調査区では偕行社（陸軍将校クラブ）の基礎と思われる煉瓦とコンクリート製の構造物が見つかりました。また、昭和9（1934）年の室戸台風による岡山大水害に伴って廃棄された多量の生活用品、昭和20（1945）年岡山空襲時の焼夷弾の部品など、近現代史の貴重な資料も発見されています。

このように各種の調査を通じて、縄文時代晩期から現代まで連綿と続く津島遺跡の歴史が、徐々に明らかになりつつあります。調査で蓄積された膨大な遺構・遺物のデータは、報告書として刊行されるとともに、今後の考古学的研究や教育活動の素材としての活用も期待されます。

調査と並行して、津島遺跡全体の整備計画も進んでいます。その一環として平成14（2002）年度には、園内中心部にとどまっていた国史跡の範囲が、確認調査の成果に基づき北側へ拡張され、一層の保護・保存の強化が図られました。今後は、都市公園としての利便性にも配慮しつつ、調査の成果を生かした遺跡の整備を平成20（2008）年度をめどに進めていく予定です。

また、新しい陸上競技場（桃太郎スタジアム）メインスタンドの1階には、出土した主要な遺物や写真・映像などを用いて津島遺跡を紹介する「遺跡&スポーツミュージアム」が開設されました。入館は無料で、休館日は毎週月曜日と年末年始です。総合グラウンドにお越しの際はぜひお立ち寄りください。（岡本泰典）

そばん 礎板が使用された竪穴住居 —岡山市・伊福定国前遺跡—

伊福定国前遺跡は、岡山市伊福町にある県立岡山工業高校の地下に眠る遺跡で、著名な津島遺跡の南西に隣接して存在しています。平成14(2002)年に校舎の建て替えに伴う発掘調査を行い、弥生時代後期(約1,800年前)から中世にかけての多くの遺構を検出しました。今回の1,000㎡ほどの調査区内だけでも、約40軒もの竪穴住



柱穴内の礎板

居や整理箱350箱にもものほる大量の土器等が発見されています。

その中で、特筆されるのは、それらの住居の大半の柱穴の底から、礎板と呼ばれる木材が出土したことです。礎板とは、家の柱が地中深く沈んでいかにように、柱の根元を受ける形で横に敷かれた木材のことです。いわば、礎石の弥生時代版と言えるでしょう。出土した礎板にはいろいろな種類があり、棒状のものから太い丸太材のものまで、大きいものでおよそ55cmになる木材もありました。

岡山県内で礎板が使われている住居は、雄町遺跡や百間川原尾島遺跡などのように、沖積地の中でも砂や粘土でできたゆるい地盤にあることから、その土地、土地での創意工夫の結果の一つであると考えられます。当時の人々の家を建てる時の苦勞が想像されます。(安永周平)

かわらがま 瓦窯の発見 —熊山町・土井遺跡—

土井遺跡は赤磐郡熊山町に所在します。平成14(2002)年度の調査では様々な時期の遺構を確認しましたが、なかでも埴輪を焼いた窯跡の調査は県内では初めてであり、貴重な成果を得ることができました(本誌第33・34号参照)。

今年度も引き続き調査を進めていたところ、窯跡が新たに一つ見つかりました。この窯跡は古代の瓦を焼いたもので、山の斜面をトンネル状にくり貫いた地下式の^{あな}竈です。長さは6m、幅は1.2mを測り、煙突部に向かう床面に六つの段を持ちます。築窯当初は、瓦のほかに須恵器を焼くためにも利用していましたが、床を一度修復した後は瓦以外のものは焼いていません。

埴輪窯と瓦窯が見つかったことで、この地域が焼き物を生産するのに適した地域であったことがうかがえます。土井遺跡周辺の字名は可真(カマ)といい、その由来を考えるうえで、興味深い発見となりました。(重根弘和)



窯跡

竪穴住居は何回建て替えられているのか？ —久世町・樋ヶ鼻遺跡—

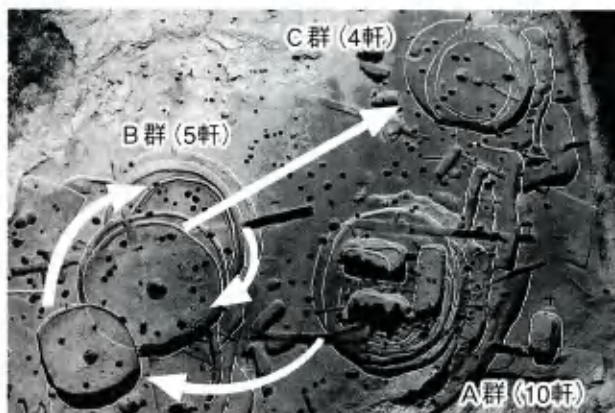
樋ヶ鼻遺跡は真庭郡久世町中原に位置し、日本川左岸の丘陵先端部に立地します。発掘調査は平成14（2002）年4～9月に実施し、弥生時代中～後期の集落跡、古墳時代後半期の墓、江戸時代の墓などが見つかりました。

弥生時代の集落跡は小さなムラながら、竪穴住居が35軒も見つかり、このうち円形の竪穴住居19軒は岩盤の間の狭い部分に密集し、大きく三つの住居群に分かれます。これら三つの住居群は各地点で何回も建て替えられており、調査は難航を極めました。建て替えのある竪穴住居の調査は、埋まった順番を土層断面によって確認し、新しい住居から順番に掘っていきます。土層断面による住居の新旧関係や出土土器を整理した結果、住居の建て替えの回数・順番や住居群の移り変わりが次第に分かってきました。

弥生時代中期後葉はA群に住居を構え、9回建て替えています。後期初頭になるとB群へ移

り、前葉まで4回建て替えを行っています。後期中葉はC群に移動し、建て替えは3回です。

このように三つの住居群は、弥生時代中期後葉から後期中葉（今から約2,100年～1,900年前）にかけて、竪穴住居を連続して建て替え、各時期で地点を移動しながら営まれており、この間の建て替えは計18回にも及びます。（米田克彦）



竪穴住居の建て替えと移り変わり

この土器はどこから・・・？ —岡山市・川入遺跡—

古墳時代の溝底から出土した、分厚い土器の破片を丹念に復元してみると、一抱えもある大きな壺になることがわかりました。壺の上部の肩には、丁寧な刻み目で飾られた3条の帯が貼り付けられています。岡山県では類例のないこの珍しい土器は、県道吉備津松島線改築に伴い発掘調査を行った、岡山市川入遺跡から平成13（2001）年に出土したものです。いったいどこで作られた土器なのか？吉備地方以外のどこからか移住してきた人が、この地で製作したのか？観察すればするほど、疑問が湧いてきます。

ある日、弥生土器研究の第一人者高橋 護先生に見て頂く機会に恵まれました。土器を一目見るや、即座に「成川や！」の一言。

成川は現在の鹿児島県の南端、薩摩半島指宿温泉近くの揖宿郡山川町にある有名な成川遺跡のこと、出土した特徴的な土器は「成川式土器」

と呼ばれているのです。はるか700km以上も離れた場所からたどりついた土器、舟で運ばれたのかあるいは、南九州から何らかの事情で移住してきた人が作ったのか？土器に含まれる砂粒などの分析によって、製作場所が特定できる可能性を模索しています。（岡田 博）



帯で飾られた壺（高：47cm）



帯の細部

センターの活動から

大地からの便り — 県内の発掘調査報告会 —

今年度も「大地からの便り」と題して、県内の発掘調査の報告会を8月23日(土)に岡山県立美術館にて開催しました。当日は各遺跡の映像をまじえた報告のほか、パネル写真展示・出土品展示も行いました。参加者は201名にもものほり、夏の暑さにも負けない程の熱気でした。

報告のあった遺跡は次のとおりです。



展示室で大人気? 「盾持ち人」の埴輪

<第1部> 最近の発掘調査から

- ①ヒロダン・小坂向遺跡 (県文化財センター)
- ②土井遺跡 (県文化財センター)
- ③猿喰池製鉄遺跡 (熊山町教育委員会)
- ④万富東大寺瓦窯跡 (瀬戸町教育委員会)

<第2部> 津島遺跡から

- ⑤近年の津島遺跡の発掘調査 (県文化財センター)
- ⑥津島遺跡調査の経緯と展望 (県文化財センター)

<パネル展示・出土品展示のみの遺跡>

- (1)伊福定国前遺跡 (県文化財センター)
- (2)樋ヶ鼻遺跡 (県文化財センター)
- (3)川入遺跡 (県文化財センター)
- (4)国司尾・天神遺跡 (県文化財センター)
- (5)赤羽根イナリ古墳 (高梁市教育委員会)
- (6)賞田廃寺 (岡山市教育委員会)
- (7)石仏上遺跡 (勝央町教育委員会)
- (8)京坊たたら遺跡 (県文化財センター)

最近刊行された報告書

当センターでは、昨年度末に新たに6冊の報告書を刊行しました。これらの報告書は、県総合文化センターや岡山市立中央図書館あるいは県内各市町村教育委員会にあります。また各都道府県の関係機関などにも配布しており、学術研究や埋蔵文化財の普及・啓発のために活用されています。内容などの詳細については、当センターへお問い合わせ下さい。



- ①岡山県埋蔵文化財発掘調査報告170『河内構遺跡 河内城跡 河内遺跡 ナル林遺跡 久田上原城跡 北条高下遺跡 峇畑遺跡 岡遺跡 比丘尼ヶ城跡 城峪城跡 札ノ尾遺跡』 苦田ダム建設に伴う発掘調査1<奥津町>
- ②同171『田井たれをず遺跡 田井ちご池遺跡 岡東高塚遺跡』 ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査<勝央町>
- ③同172『北坂奥遺跡』 一般農道整備事業(是里2期地区)に伴う発掘調査<吉井町>
- ④同173『津島遺跡4』 岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査<岡山市>
- ⑤同174『前内池遺跡 前内池古墳群 佐古遺跡』 主要地方道佐伯長船線(美作岡山道路)道路改築に伴う発掘調査<熊山町>
- ⑥同175『岡山城二の丸跡』 県立図書館建設に伴う発掘調査<岡山市>

中学生の職場体験から

最近、文化財センターには、中学生の職場体験の申し入れが増えていて、毎年何組かの中学生が発掘調査に関わる仕事を体験しています。当センター内には様々な仕事がありますが、発掘現場の体験と室内の整理作業の両方をやってもらうのが通常です。

発掘現場では、実際に道具を使って一生懸命土を掘っていきます。実際に現場の空気に触れることで、生徒達の感動も多いようです。「土の中から土器が出てきてうれしい。」とか「ほくが一番大きい土器を見つけた！」などの新鮮な感想をたくさん言ってくれます。また、掘る仕事だけではなく、図面を描くこともしてもらいます。写真は古墳の石棺を実測しているところです。中には我々調査員より上手な図面もあったりします。

室内作業では、土器の洗浄や接合をします。特に接合の仕事には興味があるようで、「土器を

くっつけるのがこんなに難しいとは思わなかった。」とか「かけらがだんだん形になってきてうれしい。」などの感想があります。

これからも当センターでは職場体験を積極的に受け入れますので、発掘の仕事に興味のある人は、じゃんじゃん来てください。



石棺の実測をしている様子

センター収蔵品紹介 vol.1 一西江遺跡出土の特殊壺・特殊器台一

センター収蔵品の中で最も貸し出しの多いものの一つがこの土器です。出土地は阿哲郡哲西町上神代で、昭和51(1976)年、中国縦貫道建設に伴う発掘調査によって発見されました。発見されたところは、西江遺跡の南端部にある小さな丘陵の先端部です。この付近には、弥生時代後期の墳墓群が所在し、2基の方形台状墓と132基の土坑墓がありました。特に注目されたのが特殊壺・特殊器台です。

出土状況を見ると3個の特殊器台の基部が南北に接するように置き並べられ、さらに南側にも1個倒れていたことから、本来は4個を直線的に並べて立てていたことが分かりました。これらは、すべて山の方へ倒れていましたが、そのうちの1個は特殊器台の上に特殊壺を載せた状態のまま倒壊しており、実際に特殊壺と組み合わせられて使われたことが確認されました。全体

を復元出来たのはこの1個体分だけです。

特殊器台は岡山県を中心に分布していて、口縁部と脚部が広がり、筒状の胴部には独特の文様が描かれています。外面は丹塗りされていて、高さ1mくらいあり、壺を置くと目立つ墳墓祭祀品です。のちに、この系譜の土器が大和地方の大型古墳の墳丘にも並べられるようになり、円筒埴輪のもとになったとされています。

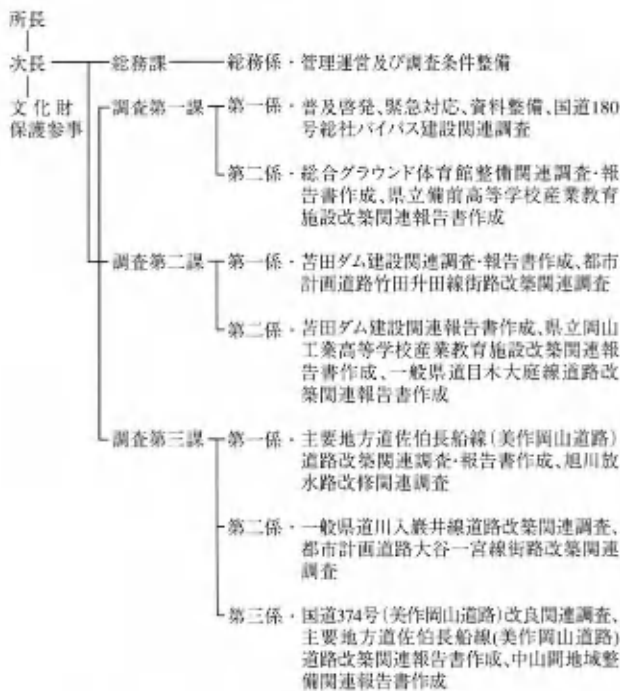


特殊壺・特殊器台

(正岡睦夫)

岡山県古代吉備文化財センターの組織と職員 (平成15年度)

<組織>



<職員>

所長 正岡 睦夫
次長 藤川 洋二
文化財保護参事 松本 和男

総務課
課長 中田 哲雄

総務係
課長補佐(係長) 笏本 弘忠
主任 小坂 文男
主事 中塚 廣佳・中藤 路子
平井 利尚・澤 将人

調査第一課
課長 岡田 博

第一係
課長補佐(係長) 光永 真一

文化財保護主幹 宇垣 匡雅 (山陽町へ派遣)
文化財保護主査 徳田 正紀・大橋 雅也
文化財保護主任 渡邊 恵里子・尾上 元規 (文化財課本務)
文化財保護主事 小林 利晴
主事 石田 為成

第二係
課長補佐(係長) 高崎 東
文化財保護主査 亀山 行雄
文化財保護主事 岡本 泰典・團 奈歩

調査第二課
課長 伊藤 晃

第一係
課長補佐(係長) 中野 雅美
文化財保護主幹 福田 正継・岡本 寛久・内藤 善史
文化財保護主査 尾崎 光徳・澤山 孝之
文化財保護主任 氏平 昭則
文化財保護主事 松尾 佳子・上村 武
主事 和田 剛

第二係
課長補佐(係長) 江見 正己
文化財保護主査 弘田 和司
文化財保護主任 金田 善敬
文化財保護主事 小嶋 善邦・河合 忍
主事 米田 克彦
安永 周平 (7月まで)
稲谷 知子

調査第三課
課長 柳瀬 昭彦

第一係
課長補佐(係長) 山磨 康平
文化財保護主幹 二宮 治夫
文化財保護主査 藤田 裕文・高田 恭一郎
文化財保護主事 重根 弘和

第二係
課長補佐(係長) 下澤 公明
文化財保護主査 小松原 基弘
文化財保護主任 物部 茂樹
文化財保護主事 蛸原 啓介

第三係
課長補佐(係長) 井上 弘
文化財保護主幹 浅倉 秀昭
文化財保護主査 柴田 英樹
文化財保護主事 杉山 一雄
主事 山崎 孝盛・有賀 祐史



編集・発行
岡山県古代吉備文化財センター
所在地 〒701-0136
岡山市西花尻1325-3
TEL (086) 293-3211 FAX (086) 293-0142
<http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm>

●交通案内
・JR山陽本線庭瀬駅下車タクシー10分
・JR吉備線吉備津駅下車徒歩25分

開館時間 AM9:00~PM5:00
休館日 土曜日・日曜日および祝日、年末・年始